



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5 年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5 年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査 情報

2020年 1月号 Vol. 11 No. 2



Alauda arvensis
Photo by Hiroshi Uchida

結果速報

モニタリングサイト1000 2019年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみに実施）を行っています。2019年度の繁殖期は、調査を91サイト（森林74サイト・草原17サイト）にお願いしました。そのうち、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林67サイト、草原14サイトの計81サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類(2019年度)

合計148種（森林123種・草原102種）の鳥類が確認されました。これは昨年の141種より微増でした。調査地点数の多い森林サイトについて昨年の記録と比べてみると、今年は昨年よりも調査地点数も出現種数も増加していました（昨年は森林サイト58サイトで112種）。地点数が増えると確認される種数も増加しますので、地点数を考慮すると、今年の出現種数は平年並といえそうです。

出現率と優占度

次に、森林における出現率、優占度の上位種を表1・2に示しました（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）。今年の上位種の種構成を、第3期5年間全体（2013年度-2017年度）と5年前の上位種構成の結果と比べて、検討してみましょう。モニタリングサイト1000の一般サイトの調査は5年に1度実施するので、5年前の調査サイトは今回の調査サイトと大半（半分以上）が同じ場所です、ほぼ同じ場所での経年変化を知ることができます。

例年の傾向としてトップ10の下位グループに入ることができる種の順位は年変動し、10位前後を行ったり来たりしますが、最上位種のメンバーはほぼ同じ傾向があります。第3期の全調査地を集計した上位10種はウグイス、キジバト、キビタキ、コゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ホトギス、メジロ、ヤマガラ（五十音順）でした。さらに過去5

表 1. 2019年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 67)			b) 草原 (n = 14)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	88.1	1	キジバト	92.9
	キビタキ	88.1		ハシブトガラス	92.9
	シジュウカラ	88.1	3	ウグイス	85.7
4	ハシブトガラス	86.6		トビ	85.7
5	ヒヨドリ	83.6	5	ハシボソガラス	78.6
6	コゲラ	73.1	6	ヒヨドリ	71.4
7	ヤマガラ	70.2	7	カワラヒワ	64.3
8	キジバト	65.7		ツバメ	64.3
9	ツツドリ	64.2		ヒバリ	64.3
10	アオバトほか2種	62.7		ホオジロ、モズ	64.3

表 2. 2019年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 67)			b) 草原 (n = 14)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	10.5	1	ウグイス	10.2
2	シジュウカラ	6.9	2	スズメ	7.8
3	ウグイス	6.4	3	オオヨシキリ	6.7
4	メジロ	5.8	4	ホオジロ	5.4
5	キビタキ	4.9	5	コヨシキリ	4.8
6	ヤマガラ	4.1	6	ツバメ	4.4
7	ヒガラ	4.1	7	カワラヒワ	3.6
8	ハシブトガラス	3.8	8	ヒバリ	3.6
9	エナガ	3.1	9	ハシボソガラス	3.5
10	コゲラ	3	10	ムクドリ	3.3

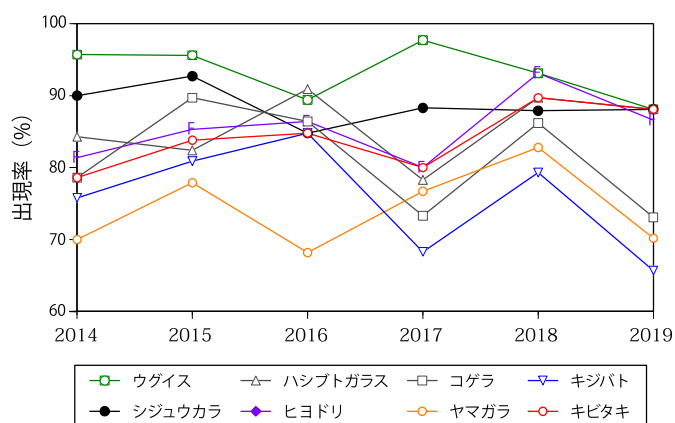


図 1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

年を含む各年度での上位種の順位の年変動を図1に示しましたので合わせてご覧ください。

この図から、今年もウグイスが他の多くの年と同様に1位を維持していることが分かります。上位種の全体的な傾向は過去の傾向を踏襲していますが、細かな変化も見られました。ウグイスは1位を維持しつつも過

表 3. 5年前(2014年度)の繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 71)			b) 草原 (n = 13)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	95.8	1	ウグイス	92.3
2	シジュウカラ	90.1		キジバト	92.3
3	ハシブトガラス	84.5	3	カッコウ	84.6
4	ヒヨドリ	81.7		ハシブトガラス	84.6
5	キビタキ	78.9	5	カワラヒワ	76.9
	コゲラ	78.9		ハシボソガラス	76.9
7	キジバト	76.1	7	トビ	69.2
8	ヤマガラ	70.4		ヒバリ	69.2
9	メジロ	67.6		ヒヨドリ	69.2
10	オオルリ	63.4	10	アオバトほか2種	61.5

去よりも少々、出現率が下がっていました。シジュウカラは多くの年に2位で安定していましたが、今回、ウグイスと同率1位となっています。本種は高い順位で、そして出現率も90%前後で変わらず安定しています。キビタキは年々順位を上げ、一昨年と昨年はついに2位になっていました。これがさらに順位を上げ、今年は初めて同率1位となりました。本種はモニタリングサイト1000において、もっとも明確な増加傾向が明らかになっている種の1つです(P4の記事を参照)。今回の結果からも以前に増して全国的にあちこちでキビタキが出現していることがわかります。5位のヒヨドリは、例年は3位か4位であることが多いのですが、昨年は同率1位と順位をあげ、増加傾向にあるのかに注目していました。しかし、今年は例年並の順位にもどっています。個体数については第2-4期の共通サイトでの比較から、ゆるやかな減少傾向が検出されており(P4の記事を参照)、広域に見られ出現率は維持されているものの、個体数は微減なのかもしれません。

今年の結果(表1)を5年前の結果(表3)や前述した第3期の上位種と見比べてみると、これら上位種の種構成も順位も、キビタキの順位が上がっていることを除けば過去とほぼ同様でした。これより、キビタキ以外の上位種の状況に大きな変化がなさそうであることが推察されます。

なお6位から10位前後の種については、平年並みといえそうです。コゲラ、ヤマガラ、キジバト、ツツドリが並んでいます。そして同率10位で、アオバト、オオルリ、メジロでした。いずれの種もこのあたりの順位の常連といえる種ばかりで例年並といえそうです。他方、過去には上位10位以内に初登場した種もありました。例えば昨年のヤブサメや一昨年のカケスなどです。これらは圏外に順位を落としています。こうした順位変動について、次項にて詳しくお話しします。

順位変動と長期的な傾向との関係

ここで、出現率における順位変動について、より掘り下げて考えてみたいと思います。出現率の順位とは、調査サイト数のうち、どれだけ多くの地点で出現したかの相対順位です。つまり、ある種が他種に比べてどれだけ多くの場所で観察されたかを示しています。ウグイスやシジュウカラといった最上位の種は、出現したサイト数がとても多く、9割近い地点で観察されています(表1)。この場合は観察地点数が多少増減しても、1地点あたりの影響力が小さいので、出現率への影響は限定的です。他方、順位が低い種ほど観察された地点数が少ないので、1地点あたりの影響力が大きくなります。また、鳥の個体数や観察さ

れる地点数は年変動することが知られています。つまり、たまたまある年に多かったり少なかったりと、値が上下するのです。これは「振動」と呼ばれています。出現率や個体数が短期的に振動しても、長年を俯瞰すれば平均的に安定しており増減がないと判断できます。過去にヤブサメやカケス、アオバトが上位10位以内に初めてランクインし、増加傾向にあるのかどうかに着目しました。こうした種は、7位から20位くらいまでの範囲で推移しています。何年も調査を継続していると、こうした種がある年にたまたま10位以内にランクインするということが起こり得ます。これは自然な振動の範囲内の可能性があります。ただし、振動の範囲内かどうかは長期的な調査結果に基づいて、将来、慎重に判断する必要があります。

一方で、キビタキの傾向は、こうした鳥達とは異なっています。以前は順位がトップ10の中盤で上下していましたが、近年は、ジリジリと順位を上げてきています。キビタキで見られている記録率や優占度の順位の上昇傾向は、以前なら、振動の範囲内かどうか確信をもてませんでした。しかし、今では明確な傾向だと判断できそうです。出現率順位の上昇は、キビタキの分布の拡大傾向を示しています。こうした成果はまさに“長期モニタリング”の醍醐味といえましょう。

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、モニタリングサイト1000が推進する長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたものと思います。毎年の調査結果の積み重ねが御紹介した種の分布傾向の判断に必須です。そしてそれを可能にするデータは多くの方々の御協力による成果です。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2019年度繁殖期の一般サイト調査には、103名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に変えさせていただきます(敬称略、順不同)。

阿部修, 阿部誠一, 阿部智留恵, 井上伸之, 瓜生篤, 猿子正彦, 奥野俊博, 岡本浩, 荻原千恵美, 梶原剛二, 鎌田朋弥, 関川實, 丸山健司, 丸山旬一, 久高将和, 橋本了次, 近藤義孝, 金井裕, 熊倉優太, 戸邊進, 五百蔵聡, 五百蔵由美子, 後藤聡, 幸徳行, 広塚忠夫, 江島浩紀, 黒沢信道, 黒沢優子, 黒田治男, 今川義康, 佐久間仁, 佐々木均, 佐藤一博, 三浦スミエ, 三浦悦子, 三浦憲悦, 三本杉松夫, 山口雅生, 山田勝巳, 室瀬秋宏, 十一正雄, 重松尚紀, 重松麻里子, 出口敦司, 小荷田行男, 小山信行, 小沢勝美, 小池重人, 小野島学, 小林繁樹, 小林富夫, 小林和子, 植田潤, 植木正勝, 森茂晃, 神谷芳郎, 水越文孝, 菅野良一, 星野由美子, 清野信行, 西村公志, 西村泉, 西田好恵, 青木雄司, 千葉博光, 川崎康弘, 泉澄雄, 前田幹雄, 前田佑惟, 村井敏郎, 太田史絵, 大橋正明, 大徳尚人, 谷口秀樹, 中山厚志, 中石光彦, 中石光彦, 中野渡園子, 仲地邦博, 津森宏, 辻秀之, 田中葉子, 田辺毅, 渡辺健三, 渡辺修治, 嶋田和明, 東條秀徳, 藤井猛, 能重光希, 梅木賢俊, 八木聡, 尾崎高博, 浜地歩, 平田聡子, 北川直樹, 明日香治彦, 矢吹正, 柳田一郎, 柳田直子, 柳田和美, 葉山政治, 鈴木敏祥, 鷺田善幸

結果速報

2019年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植田睦之(バードリサーチ)

2019年の繁殖期は、27の森林サイトで調査を行いました。これまでの記録種数をみると(表1)、多少の増減はあるものの、各サイトにおける毎年の種数は比較的安定していました。野幌サイトは2018年は、確認種数が10種と極めて少なかったのが、今年は18種とやや回復しました。まだ例年よりはすくないのですが、ヒグマ出没の入林規制で、調査時期が遅くなった影響もあるかもしれません。

表 1. 2009～2019年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数

サイト名	種数																		
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19								
足寄	27	33	30	30	34	28	28	28	31	32	32								
雨龍	33	27	36	32	29	25	29	31	26	27	24								
苦小牧	26	28	24	25	29	24	23	29	28	23	27								
カヌマ沢	20	21	24	19	22	24	23	23	21	23	24								
大佐渡	25	32	27	31	27	32	25	28	29	27	27								
小佐渡	30	33	28	27	32	29	29	31	35	26	30								
小川	22	24	25	26	33	30	28	28	21	26	24								
那須高原	30	36	32	32	28	31	27	32	32	30	26								
大山沢	27	36	29	27	30	29	30	29	25	27	28								
秩父	33	38	28	29	31	31	28	31	29	25	29								
カヤの平	22	23	25	29	27	27	30	20	26	25	28								
おたの申す平	19	20	14	17	22	23	20	17	23	28	22								
愛知赤津	23	19	22	18	22	22	19	26	23	21	18								
芦生	25	25	20	22	17	25	17	23	23	24	24								
上賀茂	23	22	16	21	21	23	26	19	17	17	13								
和歌山	24	19	19	23	21	20	20		21	15	15								
市ノ又	20	21	18	22	23	19	18	22	22	15	21								
綾	22		24	23	25	25	18	20	21	23	19								
田野	22		25	20	24	22	24	22	22	22	22								
与那	16	17	16	17	17	16	20	16	16	17	15								
奄美		19	18	16	17	16	18	17	17	16	15								
大雪山					32					34									
野幌			31			31	23	27	28	10	18								
大滝沢	23				24					24									
早池峰			22				25												
青葉山		26				24	24	25	27	23	24								
金目川			35				31												
高原山	27					34				33									
筑波山	28					28				26									
西丹沢	24					32				30									
富士			30								27								
函南		27					27												
御岳濁河		22					23												
木曾赤沢	20				16					18									
三之公						24					21								
春日山			25					24											
大山文珠越			23						31										
半田山				15					21										
臥龍山			23							26									
宮島	21					23					16								
佐田山				16						18									
対馬龍良山				14						21									
粕屋			20					23											
椎葉		26				22					21								
屋久島スギ林				15						13									
屋久島照葉樹林		14								18									
西表	15								14										
小笠原石門			4						6										

シカの影響がカッコウ類へも

これまでのニュースレターでも紹介してきましたが、近年、コアサイトではシカの影響による藪を利用する鳥の減少が起きています。その影響が、さらにカッコウ類へも波及して

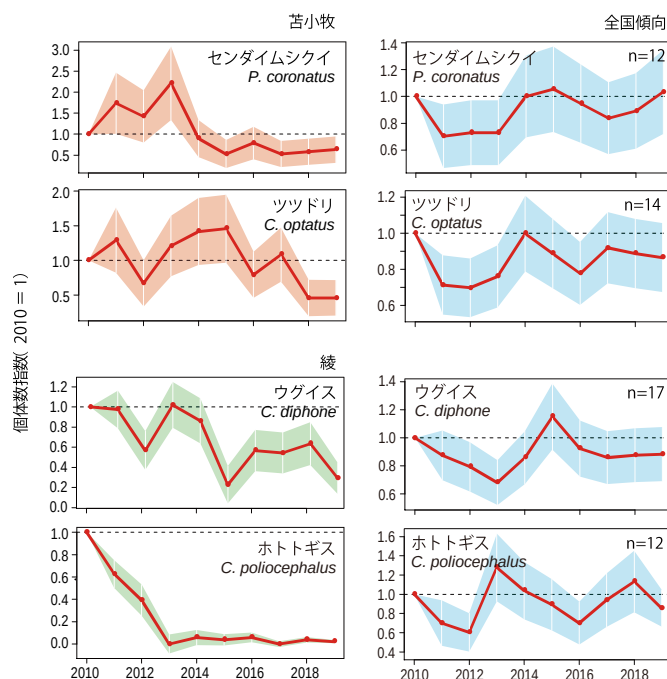


図 1. 藪を利用する種とそれに托卵するツツドリやホトトギスの個体数変化。シカの影響が顕著な苦小牧および綾サイトの状況と、シカの影響の小さい全国の状態を示した。

いることがわかってきました。

調査地をシカの影響の大きい場所と軽微な場所に分け、そこに生息する藪を利用するウグイスやムシクイ類とそれらに托卵するツツドリやホトトギスの個体数変化を調べました。するとシカの影響が軽微な調査地ではこれらの鳥の数には有意な変化はありませんでしたが、シカの影響が顕著な調査地ではウグイスやムシクイ類もカッコウ類もすべて減少していたのです(図1)。図1に示していないシカの影響の大きい調査地、秩父大山沢や丹沢でも同様の傾向が見られました。つまり、シカの影響で藪の鳥が減り、それがそれらの鳥に托卵するカッコウ類をも減らしたのではないかと考えられるのです。

シカにより減少している種にはコルリもいて、コルリにはジュウイチが托卵します。残念ながら、調査地におけるジュウイチは記録頻度が低く、解析に耐えられる情報は得られませんでした。今後も情報を蓄積していき、ジュウイチへも影響が出ているか明らかにしたいと考えています。ただ、ジュウイチはオオルリにも托卵します。オオルリにはシカの影響はあまりないようなので、そうした托卵鳥の幅もカッコウ類の増減に影響しているかもしれません。

調査へのご協力ありがとうございました

2019年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、上原一郎、梶田 学、川崎慎二、金城孝則、小林 峻、今野 怜、齋藤純子、佐々木務、高美喜男、瀧本宏昭、田谷昌仁、田中宏武、谷脇智和、中村 豊、濱田哲暁、日比野政彦、平野敏明、外間、堀田昌伸、柳田和美、梁瀬桐子(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

結果速報

一般サイトでの第4期までの個体数の変化

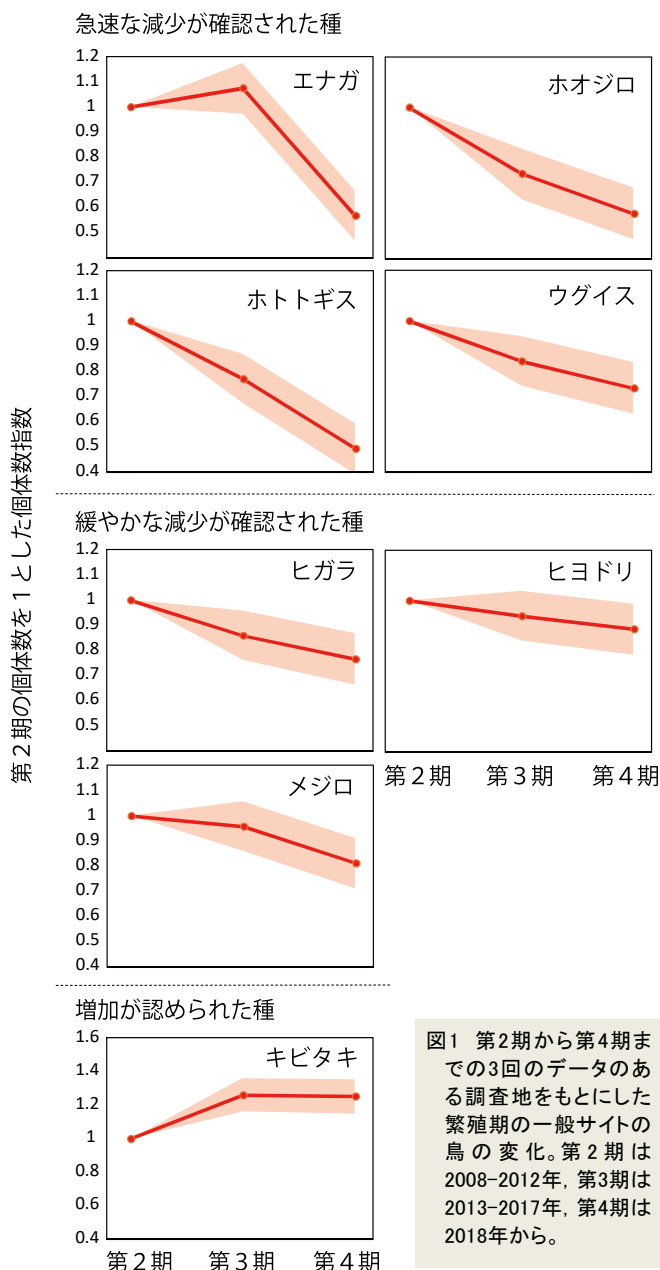
葉山政治（日本野鳥の会）

一般サイトは5年で全国を一巡する調査を行っています。陸生鳥類の調査方法がスポットセンサスに統一された第2期からすでに10年がたち、2回の調査が行われました。そして、昨年度から第4期3回目の調査がスタートしました。今年の繁殖期の調査が終了した時点で、森林・草原合わせ142サイトで3回のデータが揃いました。これまでは、平均出現率や平均優占度を使って変化を見てきましたが、今回は森林サイトのなかで、第2期から第4期の3回のデータが得られた森林環境の118サイトの繁殖期のデータを使って、種ごとの変化傾向を見てみました。なお、解析対象種は、平均出現率が50%以上のものを対象としました。

検討にはTRIMという統計ソフトウェアを使用しました。TRIMはEUで行われている繁殖鳥類モニタリング調査を解析するために作られた統計ソフトで、一般化線形モデルを使ったものです。

結果を見ると、コアサイトの解析でも明らかにされているキビタキの増加や、シカの影響によると考えられるウグイスの減少、それに起因すると思われるホトギスの減少などが一般サイトでも示されました。また、エナガやホオジロ、緩やかながらヒヨドリやメジロでも減少が認められました。これらの中でホオジロとメジロは第2期と第3期を比較した一般サイトの結果でも減少が大きかった種として挙げられていたものです。メジロやヒヨドリは都市部でもよく見かけられる種で、減少しているとの印象はありませんでしたが、本来の生息地である里山的な森林では減少が起きているのかもしれない。

草原での状況や越冬期については、まだ解析対象とできるサイト数が少ないため今回は解析は行っておりませんが、今後第4期調査が進めば解析可能となってきます。また、地理的な変化の状況の違いなども見られるようになっていくと思われます。



越冬期の鳥の分布調査にご協力を

全国鳥類繁殖分布調査にあわせて、現在、越冬分布調査も行っています。決まったコースで調査を行う繁殖期とは異なり、普段の観察記録をアンケートで情報収集しています。モニ1000調査でもミソサザイがより北で越冬している様子が見えてきていますが(図1)、多くのデータが集まることで、温暖化や積雪の変化に伴う、越冬期の鳥の分布の変化がより明らかになってくると思われます。ぜひみなさんの普段の観察記録をお送りください。

対象は、越冬している鳥類全種です。データの送信方法としては、以下のフォームでお送りいただく方法と、バードリサーチの「フィールドノート(さえざりナビ)」に入力いただく方法があります。ご協力、よろしくお願いいたします。

第3回自然環境保全基礎調査

モニ1000 II期調査

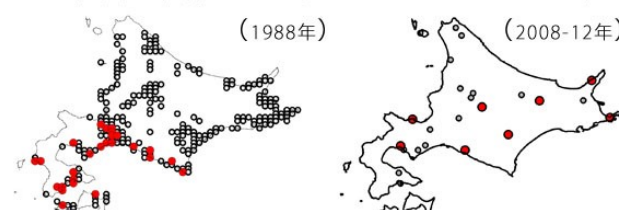


図1 モニ1000調査から見えるミソサザイの分布の変化。北海道東部でも越冬するようになった。●がミソサザイが越冬期にみられた調査地

フォーム: <http://www.bird-atlas.jp/wba.html>

フィールドノート(さえざりナビ):

http://www.bird-research.jp/1_saenavi/fnote.html

事務局からのお知らせ

全国鳥類繁殖分布調査

約9割の調査が完了しました

植田陸之(バードリサーチ)・葉山政治(日本野鳥の会)

2016年から始まった繁殖分布調査も4年目となり、1,826人の方に調査にご参加いただき、2,062コースの調査をすることができました。ついに全コースの約9割の調査が完了したことになります。

日本の鳥は減っている？

これまでの繁殖分布調査では、分布の拡大/縮小に注目して結果を見てきました。1970年代のデータには個体数情報は残っていませんが、1990年代そして今回のデータには、現地調査の際の個体数データもあります。北米の鳥の個体数が1970年頃から29%も減少した(Rosenberg et al. 2019)というショッキングなニュースがありましたので、日本ではどうなのかと、1990年代と今回、ほぼ同じルートで調査ができた調査地について、個体数を比較してみました。

記録された鳥全ての数を合計した総個体数を1990年代のそれと比較すると、コース平均では、 33.1 ± 320.7 (SD) 羽有意に減少していました。極めてばらつきの大きいデータですので、平均値はそれほどあてになりませんが、1990年代の平均個体数は203羽なので、北米と匹敵する減少率にあたります。詳細な解析をしつつ、その動向を探っていく必要がありそうです。

増減をヒストグラムにして見ると、目につくのは、数百羽以上といった極端な増減のほとんどが、減ったケースであることです(図1)。こうした大きな増減の内訳をみると、その多くはコロニー性の水鳥の増減によるものでした。これまでのニュースレターでも紹介してきましたが、ゴイサギやアマサギ、コサギなどの小型のサギ類が減少していることがわかっていて(植田 2018)、それが主な原因になっていました。

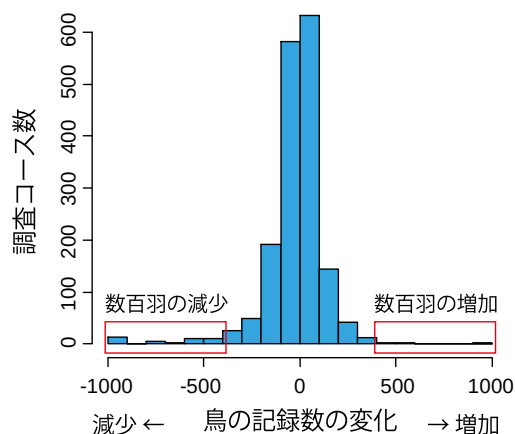


図1 各コースで記録された鳥の総個体数の1990年と今回の変化。0より右は個体数の増えた調査コースで左は減ったコース数。

表1 普通種の中の減少している種と増加している種

種名	平均減少率	種名	平均増加率
ゴイサギ	-19.6 ± 208.9	キビタキ	3.7 ± 5.9
カワラバト(ドバト)	-14.9 ± 190.2	センダイムシクイ	2.8 ± 8.0
スズメ	-8.7 ± 42.9	ヤマガラ	1.7 ± 6.9
イワツバメ	-8.4 ± 48.4		
ムクドリ	-7.7 ± 46.4		
ツバメ	-5.2 ± 19.4		
トビ	-4.0 ± 62.9		
ホオジロ	-1.7 ± 9.7		
ハシボソガラス	-1.2 ± 14.9		

減っている身近な鳥

こうしたコロニー性の水鳥以外にどんな鳥が減っているのでしょうか？ 全体の減少には個体数の多い「普通種」の動向が大きく影響を及ぼすと考えられるので、普通種に焦点をあてて、その増減を見てみました。対象は1990年代もしくは今回のいずれかの時点で個体数の上位20種に入っている鳥としました。それらについて、有意な1羽以上の増減のある種を抽出してみると、減少の激しい順にゴイサギ、ドバト、スズメ、イワツバメ、ムクドリ、ツバメ、トビ、ハシボソガラスでした(表1)。増加していたのは、キビタキ、センダイムシクイ、ヤマガラでした。

減っている種は(トビは森にもいますが)開けたところに生息する鳥という共通点があります。そして、増えている鳥は樹林に依存するという共通点がありました。この傾向は、これまでに示してきた分布の増減の解析結果とも一致しており、また、キビタキやヤマガラが増加はモニ1000の結果とも一致していて、日本の自然の動向を示していると考えて良さそうです。

ドバトは給餌がされなくなった影響が大きそうですが、それ以外の鳥の増減は、中山間地では耕作放棄などで畑などが荒地になり、平地では公園や街路樹などが大きく育ち、また河川敷も木が大きくなり樹林化していることなどで、樹林に依存する鳥には良い環境になり、開けた場所に住む鳥にとっては悪い状況になっていることを反映しているのかもしれません。



減少しているゴイサギ (三木敏史)

調査へのご協力をお願いします

たくさんみなさまのご協力のおかげで以上のようなことが見えてきました。来年が調査の最終年ですが、まだ、調査員の決まっていないコースもあります。

また、現地調査だけでは、「その地域にいるのに調査では記録することができなかった種」もいるので、分布図に漏れができてしまいます。そのため、アンケート調査でそれらを補い、より正確な分布図をつくっていく必要があります。

ぜひ、調査への参加をお願いします。調査への参加登録は以下のホームページより行うことができます。登録いただけたら、調査地の情報等お送り致します。調査へのご参加、お待ちしております。

繁殖分布調査のページ: <http://www.bird-atlas.jp/>

モニタリングサイト1000

研修・交流会レポート

菅野良一（日本野鳥の会）

モニタリングサイト1000事業は、5年を1期として調査結果を分析しており、今年度は第4期の2年目、通算で17年目となります。これまで多くの市民調査員の皆さまのご協力によって運営されてきました。大規模、かつ長期的に継続される本事業にとって、調査員の確保とモチベーションの維持は欠かせないものです。しかしながら、各地の調査サイトにおいて、年々調査員の高齢化や後継者不足が課題となっています。

この課題を解決するための次世代調査員の確保と調査員同士の交流や情報交換を目的に、研修会を毎年全国各地で開催してまいりました。本年度も3か所で開催を企画し、12月現在、東京都と群馬県で研修会が終了し、愛媛県での開催を残すまでとなりました。

今年度の研修会の特徴は、開催県周辺からもご参加いただけるようにするため、交通の便の良い場所に、講義会場や実習会場に選んだところにあります。おかげさまで、東京会場は1都4県から、群馬会場は1都6県から広くご参加いただきました。各県にお伺いできるのが理想ではありますが、現実にはなかなか難しいため、これからは開催県周辺の県からもアクセスしやすい場所を、研修会場に選んでいきたいと思っています。

さて、各会場の雰囲気ですが、東京会場では、鳥を見始めて間もない方の参加が多く、1つ1つのリアクションがとても新鮮な感じでした。即調査員に、というのは難しい感じではありましたが、参加者の皆さまに「研修会を通じてより鳥に興味を持った」、「野鳥の会が主催する探鳥会に参加し



東京会場での室内講義の様子

て色々勉強してみたい」などとおっしゃっていただき、この先に繋がる可能性を強く感じた研修会となりました。何しろ残りまだ83年もあるモニタリングサイト1000陸生鳥類調査です。その歴史の中のいずれかで、調査員として活躍してくださる日が訪れることをお待ちしております。

群馬会場は、打って変わって、ベテランバードウォッチャーが多数参加くださり、地元ならではの情報も色々と教えていただける、重厚な感じの研修会となりました。そして、どちらの会場でも、懇親会では座学で疲れた頭を食べ物や飲み物でリフレッシュして、情報交換に、調査員同士の交流に、時間が足りないくらいに盛り上がりました。この先に何う愛媛会場の研修会も、きっと東京とも群馬とも違った独自の雰囲気になるのではないかと、今からとても楽しみにしています。

来年度、皆さまがお住まいの近くに、研修会で何かかもしれません。他県であっても、意外と手軽に行けるルートもあるかと思っています。近県で研修会が開催されます際は、ぜひご参加をご検討ください。

モニタリングサイト1000概要版パンフレットができました！

モニタリングサイト1000の特徴や、モニタリングの必要性、各生態系の成果を取り上げ、「日本の自然に何がおきている？ —市民・研究者・行政が力を合わせわかってきたこと— モニタリングサイト1000概要版」を作成しました。生物多様性やモニタリングの重要性について理解を深めること、生物多様性保全のために何ができるのか考えること、保全施策への活用を促していくことを大きな目的としています。生物多様性センターのモニタリングサイト1000ホームページでも公開していますので、ぜひご覧ください。

【モニタリングサイト1000ホームページ】

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>